

養育者の育児不安および育児環境と虐待との関連

保育園における研究

モチヅキ ユキコ* 田中 エミコ*^{2,4}* シノハラ リョウジ* スギサワ ユウカ³*
 望月由妃子* 田中 笑子*^{2,4}* 篠原 亮次²* 杉澤 悠圭³*
 トミサキ エツコ* ワタナベ タエコ* トクタクケン タロウ* マツモト ミサコ*
 富崎 悦子* 渡辺多恵子* 徳竹健太郎* 松本美佐子*
 スギタ チヒロ* アンメ トキエ*
 杉田 千尋* 安梅 勅江*

目的 児童虐待件数は毎年増加しており、虐待の予防、早期発見、早期支援に関し、実態に基づく適切かつ具体的な取り組みが求められる。本研究の目的は、保育園の園長および保育士が「虐待疑い」と評価し、市と情報交換しながら見守りをしている子どもの養育者の育児不安および育児環境と虐待との関連を明らかにし、虐待の予防、早期発見・早期支援の一助とすることである。

方法 A市の全公立保育園に在園する子どもの全養育者1,801人に育児支援質問紙および育児環境指標（ICCE）への記入を依頼した。育児支援質問紙は養育者の育児困難感や不安・抑うつ傾向を、育児環境指標は子どもと環境とのかかわりの質や頻度などを測定する。専門職が「虐待疑い」と評価した子どもの養育者を「虐待群」、それ以外を「非虐待群」とした。育児困難感、不安・抑うつ傾向および育児環境と虐待との関連を検討するため、両質問紙の回答をリスク群、非リスク群の2群に分類し、各リスク項目の有無の独立性について、Fisherの正確検定により検定した。さらに虐待と有意に関連する要因を他の項目の影響を互いに調整した上で検討するため、「虐待」を目的変数、育児不安と養育環境で有意な関連のみられた項目を説明変数、性別と年齢を調整変数とし、多重ロジスティック回帰分析によりオッズ比を算出した。

結果 多重ロジスティック回帰分析の結果、「虐待群」は「非虐待群」と比較して、育児不安では、「不安や恐怖感におそわれる」が4.9倍、育児環境では、「保育園以外に子どもの面倒をみてくれる人がいない」が4.7倍であり高い値を示した。調整変数（性別、年齢）では有意な関連はみられなかった。

結論 育児困難感や不安・抑うつ傾向および育児環境と虐待との関連より、保育園等の専門職が養育者への具体的かつ活用可能な支援の方策が得られ、虐待の予防、早期発見、早期支援の一助となることが示唆された。

Key words : 児童虐待, 育児不安, 育児環境, 早期支援, 保育園

日本公衆衛生雑誌 2014; 61(6): 263-274. doi:10.11236/jph.61.6_263

I 緒 言

児童虐待が社会問題として認識され社会全体としての取り組み行われてきたが、平成23年度における虐待相談受付件数は約6万件となった。児童虐待の

防止等に関する法律の施行、虐待の予防、早期発見、早期支援を強化するための改正、関係機関による虐待予防の啓発活動、福祉、保健、看護、医療等多領域、多職種による研究および実践等、様々な取り組みが行われているにもかかわらず、死亡例を含む虐待が増加しており大きな社会問題となっている。

児童虐待は、もっとも身近に存在し何の疑いもなく安心感や安全感が提供されるはずの養育者によって行われるものであり、子どもの心身の発達に深刻な影響を及ぼすと考えられる。とくに子どもの身体症状や精神発達の歪みをもたらし、トラウマの後遺症としても把握されている¹⁾。

* 筑波大学大学院人間総合科学研究科

²* 山梨大学大学院 医学工学総合研究部

³* 牛久市役所

⁴* 日本学術振興会特別研究員

連絡先：〒305-8575 茨城県つくば市天王台1-1-1
 健康医科学イノベーション棟205
 筑波大学大学院人間総合科学研究科国際発達ケア研究室 望月由妃子

児童虐待の発生要因に関する海外の先行研究では、虐待をする養育者の薬物乱用や依存、不安、抑うつ等の精神病理に焦点をあてたもの²⁾、夫婦間の問題や世代間伝達等、虐待傾向のある家族環境や家族関係に焦点をあてたもの³⁾等がある。日本における研究では、虐待をもたらす要因として、養育者側の要因と子ども側の要因に大別することが可能だと考えられてきた¹⁾。しかし、子ども側の要因が「なし（とくに見当たらない）」としたものが44%であることより、虐待の発生においては養育者自身の問題に注目すべきであるという指摘がある⁴⁾。また、家族や友人との交流が少なく孤立していることや配偶者との関係に満足していない^{5,6)}、家族内外でも対人関係の問題を抱えていること等も指摘されている⁷⁾。これらの報告は虐待をしてしまう養育者への支援の方策を示唆している。

厚生労働省の報告では虐待加害者の半数以上は母親であり、虐待の予防、早期発見、早期支援のためには、母親を含む養育者の特徴を明らかにすることが重要であることが示唆されている。一方で被虐待児の40%以上は乳幼児であり、虐待死亡児の90%は0~5歳であることより、保育園等、乳幼児期の子育て支援機関の専門職に虐待の予防、早期発見、早期対応の役割が期待されている。保育園に在園する養育者の育児不安および育児環境と虐待との関連から虐待に移行する養育者の要因を明らかにすることは、専門職が虐待の理解を深め適切な親支援の方策を提供することにつながる。

本研究の目的は、保育園の園長および保育士が「虐待疑い」と評価し、市と情報交換しながら見守りをしている子どもの養育者の育児不安および育児環境と虐待との関連を明らかにし、虐待の予防、早期発見・早期対応の一助とすることである。

Ⅱ 方 法

1. 調査方法

対象は、A市の全公立保育園に在籍する子どもの全養育者1,801人であり、養育者の育児不安感および育児環境と虐待との関連を把握するために、育児不安感や育児環境に関する質問紙調査を実施した。調査には、「育児支援質問紙」および「育児環境指標」を用いた。調査票の配布は、対象者への依頼状により個人、関係者を含め承諾を得た後、園の担任にクラス全員への配布を依頼した。調査票は子ども1人に対して1枚とし、複数の子どものいる養育者には子どもの人数分の回答を依頼した。回答者の属性は育児環境指標に回答欄を設け回答者を把握できるようにした。質問紙の回収にあたっては、保育専

門職など関係者が内容を把握できないよう厳封の上、個別の回収用封筒を用いて回収した。

質問紙調査では「育児支援質問紙」と「育児環境指標」を用いた。「育児支援質問紙」は川井ら⁸⁾が開発したもので養育者の育児困難感と不安・抑うつ傾向を評価するものである。育児困難感は、育児に自信が持てない、母親として不適格とを感じる等17項目、不安・抑うつ傾向は、心配性であれこれ気に病む、何事にも敏感に感じてしまう等7項目で構成されている。全質問項目は「表1 育児支援質問紙項目分析カテゴリー」に示した。

「育児環境指標」(Index of Child Care Environment (ICCE))⁹⁾は、育児環境評価 HOME (Home Observation for Measurement of the Environment) の枠組みをもとに作成された、子どもと環境とのかかわりの質や頻度、子どものために準備されている環境などを測定する指標である。日本での家庭訪問調査による HOME との関連性、将来の発達や気になる行動等との予測妥当性を検証した質問紙である。対象は0~6歳児の保護者等であり、4領域13項目と回答者の負担が少なく容易に情報把握ができるという特徴がある。ICCEの項目に「育児に対する自信」、「子どもが保育園に行くのを楽しみにしている」、「保護者のストレス」(妊娠期、出産直後、現在)の項目を加え、保護者の特性とした。質問項目は「お子さんと一緒に遊ぶ機会(子どもと向き合って過ごすこと)はどのくらいありますか。」、「お子さんと一緒に買い物に行く機会はどのくらいありますか。」、「お子さんを育てながら、育児の自信がなくなると感じることはありますか。」等、16項目である。全質問項目は「表2 育児環境項目分析カテゴリー」に示した。いずれの質問紙も信頼性・妥当性が確認されている。ICCEの項目に加えた「育児に対する自信」、「子どもが保育園に行くのを楽しみにしている」、「保護者のストレス」(妊娠期、出産直後、現在)については、先行研究^{10~14)}において予測妥当性が確認されている。

次に、虐待の疑いのある子どもの情報を把握するため、全保育園への訪問調査を行った。まず園長より対象属性として子どもの名前(ID)、性別、生年月日の情報を得た。虐待に関しては、園長および担当保育士が日常的な子どもや養育者の言動や状況等から、「虐待の疑いがある」と評価し、市の子育て支援課と情報交換や連携をしながら見守りをしている子どもや養育者の情報を把握した。虐待情報の把握については、園長および担当保育士より直接、子どもや養育者の状況を聴取することにより、より具体的な情報が得られるうえ、状況等の確認のための

表1 育児支援質問紙項目分析カテゴリー

質問項目	分析カテゴリー		
	リスク群	非リスク群	
育児困難感	育児に自信が持てない	はい	ややはい、ややいいえ、いいえ
	母親として不適格と感じる	はい	ややはい、ややいいえ、いいえ
	子どもをうまく育てている	いいえ	はい、ややはい、ややいいえ
	どのようにしつければいいのか分からない	はい	ややはい、ややいいえ、いいえ
	育児についていろいろ心配なことがある	はい	ややはい、ややいいえ、いいえ
	子どものことでどうしたらいいのか分からない	はい	ややはい、ややいいえ、いいえ
	私は子育てに困難を感じる	はい	ややはい、ややいいえ、いいえ
	子どものことは理解できている	いいえ	はい、ややはい、ややいいえ
	子どものことがわずらわしくてイライラする	はい	ややはい、ややいいえ、いいえ
	よその子どもと比べて落ち込んだり自信をなくす	はい	ややはい、ややいいえ、いいえ
	子どもを育てることが負担である	はい	ややはい、ややいいえ、いいえ
	とめどなく叱ってしまう	はい	ややはい、ややいいえ、いいえ
	子どもに八つ当たりしては、反省して落ち込む	はい	ややはい、ややいいえ、いいえ
	私はおこりっぽい	はい	ややはい、ややいいえ、いいえ
	私はイライラしている	はい	ややはい、ややいいえ、いいえ
何で叱られているのか分からないのに叱ってしまう	はい	ややはい、ややいいえ、いいえ	
子どもを虐待しているのではないかと思う	はい	ややはい、ややいいえ、いいえ	
不安・抑うつ傾向	心配性であれこれ気に病む	はい	ややはい、ややいいえ、いいえ
	何事にも敏感に感じてしまう	はい	ややはい、ややいいえ、いいえ
	不安や恐怖感におそわれる	はい	ややはい、ややいいえ、いいえ
	楽天的でよくよく考えない	いいえ	はい、ややはい、ややいいえ
	悲観的である	はい	ややはい、ややいいえ、いいえ
	気が滅入る	はい	ややはい、ややいいえ、いいえ
	何ともいえず淋しい気持ちにおそわれる	はい	ややはい、ややいいえ、いいえ

表2 育児環境項目分析カテゴリー

質問項目	分析カテゴリー	
	リスク群	非リスク群
子どもと一緒に遊ぶ機会	めったにない	1週に1~2回以上
子どもと一緒に買い物に行く機会	めったにない	1月に1~2回以上
子どもに本を読み聞かせる機会	めったにない	1月に1~2回以上
子どもの好きな歌と一緒に歌う機会	めったにない	1月に1~2回以上
子どもと公園に行く機会	めったにない	1月に1~2回以上
同年齢の子どもを持つ友人との交流の機会	めったにない	1月に1~2回以上
配偶者（または、それに代わる人）の育児協力の頻度	めったにない	1月に1~2回以上
家族で食事をする機会	めったにない	1月に1~2回以上
子どもの失敗への対応	子どもをたたく	それ以外
1週間のうちに子どもをたたく頻度	1~2回以上	たたかない
配偶者（または、それに代わる人）と子どもの話をする機会	めったにない	1月に1~2回以上
保育園以外に子どもの世話をしてくれる人の有無	いない	いる
子育てについて相談できる人の有無	いない	いる
育児に対する自信がなくなる	よくある	時々ある、あまりない、全くない
子どもが保育園に行くのを楽しみにしている	嫌がっている、どちらでもない、あまり行きたくない	大変楽しみにしている、まあ楽しみにしている
ストレスの程度（妊娠期、出産直後、現在）	とても高い	やや高い、中程度、低い、無い

質問も可能であると考え、質問紙調査ではなく聞き取り調査を行った。

2. 分析方法

質問紙調査における育児支援質問紙および育児環境指標の項目分析カテゴリーを「表1 育児支援質問紙項目分析カテゴリー」、「表2 育児環境項目分析カテゴリー」に示した。育児支援質問紙は、各項目の回答で最もリスクが高い「はい」を「リスク群」、それ以外を「非リスク群」として、それぞれ2群に分類した。A3, A8, C4は逆転項目である。育児環境指標は、各項目の回答でもっとも頻度が少ない群をリスク群、それ以外を非リスク群とし、2群に分類した。また、保育園の訪問調査により、虐待の疑いがあり、市と情報交換や連携をしながら見守りをしている子どもを「虐待群」、それ以外を「非虐待群」に分類した。

本研究では、「虐待群」の養育者の特徴を「非虐待群」と比較しながら明らかにした。育児困難感、不安・抑うつ傾向および育児環境の特徴と虐待との関連を検討するため、それぞれの項目をリスク群、非リスク群の2群に分類した。分析1として「虐待群」および「非虐待群」の各リスク項目の有無の独立性についてFisherの正確検定により検定した。分析2では、分析1で虐待と有意な関連のみられた項目について単変量解析を行い虐待と関連することを確認した。分析3においては、虐待と有意に関連する要因を他の項目の影響を互いに調整した上で検討するため、「虐待」を目的変数、育児困難感、不安・抑うつ傾向と育児環境において、Fisherの正確検定および単変量解析で虐待と有意な関連のみられた11項目を説明変数、性別と年齢を調整変数とし、多重ロジスティック回帰分析によりオッズ比を算出した。モデルの適合度の指標としてHosmer-Lemeshow testを用いた。

多重ロジスティック回帰分析を用いた理由は以下のとおりである。多重ロジスティック回帰分析においては、交絡の影響を考慮して独立な関連因子の評価が可能であり、また、オッズ比によりリスクの強さを定量的に評価できる。育児困難感、不安・抑うつ傾向は先行研究においても虐待との関連が明らかになっている。また、核家族化、地縁・血縁の希薄化等、子育て中の養育者を囲む育児環境が虐待に移行する要因であることも先行研究で明らかになっており、育児困難感、不安・抑うつ傾向、育児環境は虐待に移行する要因として関連があるといえる。全国の児童相談所における虐待相談受付件数が毎年増加しており、実践の場における虐待の予防、早期発見、早期対応のためには、虐待と関連のある要因を

複合的に検討し、虐待と有意に関連する項目を明らかにすることが求められている。虐待と関連する要因を明らかにし、実践の場における具体的な対応方法を提供するためには多重ロジスティック回帰分析が最も適していると考え分析に活用した。

データの分析においては統計的有意水準を5%とし、統計処理にはPC版SAS統計パッケージVer.9.3を用いた。

3. 用語の定義

1) 児童虐待

児童虐待の定義は「児童虐待の防止等に関する法律」に基づいている。

2) 「虐待群」、「非虐待群」

本研究における「虐待群」は、保育園長および担当保育士が「虐待疑い」と評価し、市と連携し情報交換しながら見守りをしている子どもの養育者とし、それ以外を「非虐待群」とした。

4. 倫理的配慮

本研究は、調査に同意の得られた保育園を対象として実施し、養育者の同意については、保育園を通じて文書による説明を行うとともに要望のあった保育園の養育者には直接口頭で説明し同意を得て実施した。個人情報保護のため氏名は匿名化し、ID番号で管理した。養育者回答の育児支援質問紙および育児環境指標に関しては、保育専門職など関係者が内容を把握できないよう、個別の回収用封筒を用い回収した。また筑波大学大学院人間総合科学研究科倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号第22-327号平成22年12月13日）。

Ⅲ 結 果

1. 対象属性

全養育者1,801人のうち、子どもと養育者のデータに整合性がなかったものおよび欠損を除外した対象属性および回答者の属性、質問紙の回収率を表3に示した。質問紙は、全配布数1,801人に対し1,472人から回収、回収率は81.7%であった。「虐待群」の回収率は100.0%であった。「虐待群」は28人で男児15人、女児13人、「非虐待群」は1,444人で男児723人、女児721人であった。回答者の属性は母親が最も多く、虐待群は89.3%、非虐待群は96.3%であった。

2. 質問紙調査の単純集計結果

育児支援質問紙および育児環境指標の単純集計結果を表4、表5に示した。

3. 育児困難感、不安・抑うつ傾向および育児環境と虐待との関連

育児困難感、不安・抑うつ傾向および育児環境と

表3 対象属性

カテゴリー	虐待群		非虐待群		全 体	
	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)
性別						
男児	15	53.6	723	50.1	738	50.1
女児	13	46.4	721	49.9	734	49.9
年齢						
0歳	0	0.0	19	1.3	19	1.3
1歳	3	10.7	92	6.4	95	6.5
2歳	1	3.6	191	13.2	192	13.0
3歳	4	14.3	233	16.1	237	16.1
4歳	4	14.3	326	22.6	330	22.4
5歳	8	28.6	342	23.7	350	23.8
6歳	8	28.6	241	16.7	249	16.9
回答者の属性						
母親	25	89.3	1,391	96.3	1,416	96.2
父親	2	7.1	39	2.7	41	2.8
祖母	0	0.0	4	0.3	4	0.3
祖父	0	0.0	1	0.07	1	0.1
その他	0	0.0	0	0.0	0	0.0
未記入	1	3.6	9	0.6	10	0.7

※回収率

質問紙の配布(全体)1,801人 回収1,472人(回収率81.7%)
(虐待群)28人 回収28人(回収率100.0%)

虐待との関連を検討するため、分析1の結果、虐待と有意な関連のみられた11項目を表6に記載した。育児困難感では、「何で叱られているのか分からないのに叱ってしまう」の1項目であった。不安・抑うつ傾向では「心配性であれこれ悩む」、「何事も敏感に感じてしまう」、「不安や恐怖感におそわれる」、「悲観的である」、「気が滅入る」、「何ともいえず淋しい気持ちにおそわれる」であり、7項目中6項目が虐待との関連を示した。育児環境では「1週間に1回以上子どもをたたく」、「保育園以外に子どもの世話をする人がいない」、「子どものことを相談する人がいない」、「現在のストレスあり」の4項目であった。虐待と関連する「1週間に1回以上子どもをたたく」の項目では、「非虐待群」は47.2%で約半数がたたいていると回答していたが、「虐待群」は67.9%であり虐待との有意な関連を示した。

4. 虐待に関連する要因を他の項目の影響を互いに調整した上での検討結果

虐待に関連する要因を他の項目の影響を互いに調整した上で検討するにあたり、分析2として、育児困難感、不安・抑うつ傾向および育児環境と虐待とで有意な関連のみられた11項目と虐待との関連を確認するため、11項目の単変量解析を行い、結果を表

6に示した。11項目のすべてが虐待と関連することを確認した後に、分析3として虐待と関連する要因を他の項目の影響を互いに調整した上で検討するため、多重ロジスティック回帰分析によりオッズ比を算出した。適合度の指標については Hosmer-Lemeshow test P 値 = 0.773 でモデルの適合を示した。多重ロジスティック回帰分析の結果、「非虐待群」と比較して「虐待群」に有意な関連がみられた項目は表6に示した2項目であった。しかし、単変量分析では有意であった不安・抑うつ傾向の7項目は、多重ロジスティック回帰分析により1項目に減少した。不安・抑うつ傾向では「不安や恐怖感におそわれる」、育児環境では、「保育園に以外に子どもの世話をしてくれる人がいない」であった。年齢および性別との有意な関連はみられなかった。分析1から分析3までの結果をまとめて表6に示した。

IV 考 察

専門職評価に基づく「虐待群」養育者の育児困難感、不安・抑うつ傾向、育児環境と虐待と有意に関連する項目が具体的に示され、「虐待群」養育者の特徴が示された。

1. 養育者の育児困難感と虐待との関連が示す養育者の特徴

「子どもが何で叱られているのか分からないのに叱ってしまう」養育者には自己コントロールの脆弱性、子どもへの過剰期待等の未熟性、養育者の親からの養育態度の再現、背景にある生活上の問題や夫婦間の問題等が推測される。自己コントロールの脆弱性から虐待への移行も危惧され、保育園等における専門職には、日常的に養育者の特徴を把握し、養育者とともに子どもへの適切な対応が求められる。園では子どもへの心理的ケアとともに、養育者にも十分に配慮し、相談、援助等を含む適切なサポートの提供を検討することが必要である。

2. 不安・抑うつ傾向と虐待との関連が示す養育者の特徴

不安・抑うつ傾向では、1項目を除く全項目が虐待と有意に関連しており、「虐待群」の養育者が不安・抑うつ傾向が強いという特徴が示された。不安・抑うつ傾向の強い養育者は、子育てにおける不安が強く、日常生活全般にわたり養育者としての役割を果たすことに困難が生じていると推測される。ベルスキー¹⁵⁾は、虐待の発生状況は、親の役割がうまく果たされていないためであるとして、不適切な養育を意味するマルトリートメント (maltreatment) という表現を用いた。不安・抑うつ傾向は、虐待等不適切な養育への移行を示唆する養育者の特徴とい

表4 育児支援質問紙 単純集計

領域	質 問 項 目	はい		ややはい		ややいいえ		いいえ		無回答	
		人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)
育 児 困 難 感	育児に自信が持てない	93	6.3	512	34.8	767	52.1	93	6.3	7	0.0
	母親として不適格と感じる	101	6.9	475	32.3	789	53.6	101	6.9	6	0.6
	子どもをうまく育てている	92	6.3	647	44.0	641	43.5	92	6.3	0	0.2
	どのようにしつけたらいいのかわからない	127	8.6	443	30.1	766	52.0	127	8.6	9	0.0
	育児についていろいろ心配なことがある	255	17.3	407	27.6	553	37.6	254	17.3	3	0.1
	子どものことでどうしたらいいのかわからない	79	5.4	549	37.3	765	52.0	79	5.4	0	0.2
	私は子育てに困難を感じる	71	4.8	495	33.6	834	56.7	71	4.8	1	0.3
	子どものことは理解できている	0	0.0	786	53.4	635	43.1	48	3.3	3	0.0
	子どものことがわずらわしくてイライラする	53	3.6	528	35.9	833	56.6	53	3.6	5	2.0
	よその子どもと比べて落ち込んだり自信をなくす	43	2.9	383	26.0	1003	68.1	43	2.9	0	0.5
	子どもを育てることが負担である	25	1.7	350	23.8	1,043	70.9	25	1.7	29	0.2
	とめどなく叱ってしまう	82	5.6	454	30.8	847	57.5	82	5.6	7	0.2
	子どもに八つ当たりしては、反省して落ち込む	124	8.4	408	27.7	812	55.2	125	8.5	3	0.0
	私はおこりっぽい	346	23.5	288	19.6	489	33.2	346	23.5	3	0.0
	イライラしている	180	12.2	434	29.5	530	36.0	181	12.3	0	0.3
何で叱られているのかわからないのに叱ってしまう	5	0.3	464	31.5	966	65.6	37	2.5	0	0.0	
子どもを虐待しているのではないかと思う	23	1.6	312	21.2	1,110	75.4	23	1.6	4	0.0	
不 安 ・ 抑 う つ 傾 向	心配性であれこれ気に病む	130	8.9	385	26.2	827	56.2	130	8.8	0	0.0
	何事にも敏感に感じてしまう	110	7.5	443	30.1	810	55.0	109	7.4	0	0.1
	不安や恐怖感におそわれる	58	3.9	353	24.0	1003	68.1	58	3.9	0	0.0
	楽天的でよくよ考えない	227	15.4	499	33.9	537	36.5	207	14.1	2	0.0
	悲観的である	58	3.9	493	33.5	863	58.6	58	3.9	0	0.0
	気が滅入る	80	5.4	392	26.6	920	62.5	80	5.4	0	0.0
何ともいえず淋しい気持ちにおそわれる	74	5.0	327	22.2	997	67.7	74	5.0	0	0.0	

える。また、子育て不安の高い母親ほど虐待傾向や被虐待体験が高いという研究もある¹⁶⁾。養育者の子どものに対する虐待等不適切な養育は、それがどのような形態のものであれ、被害を受けた子どもに心理的および情緒的な特定の影響を及ぼすことも報告されている¹⁾。

保育園等乳幼児期の子育て支援機関の専門職は、虐待の発生子防、早期発見、早期対応に向けて、養育者の不安・抑うつ傾向を理解した上で、養育者と子どもの双方に向けて継続した途切れない支援を提供することが求められる。また、抑うつ状態が強い養育者には医療機関への受診も考慮に入れ良好な関係の構築が望まれる。養育者に対する心理的サポートともに社会的サポートも加味した支援が必要であり、専門職には社会資源に関する情報の収集も求められる。

また、不安・抑うつ傾向の強い養育者は、子どもとの安定した関係の構築が難しいことが示唆される。乳幼児期の子どもの心身の発達には、特定の愛着対象(母親的人物)との連続した、個別的な、一貫性のある愛情に満ちた情緒的きずな—Attachmentの構築が重要である。養育者との安定した愛着形成は、子どもの心に肯定的な Internal Working Model を形成し、その後の友人関係等にみられる対人関係を良好にすることが指摘されている¹⁷⁾。虐待は、心理的安心感や安全感が保障されているはずの養育者による不適切な養育であり、Attachment に与える影響は大きい¹⁸⁾。専門職は、毎日接触することが可能な子どもや養育者であるからこそ、安定した共感的な態度で対応することを心がけることも適切な対応のひとつとして欠かせないといえる。乳幼児期の子どもの心身の健やかな発達を目指して、養育者お

表5 育児環境 単純集計

質問項目	めったにない		週に1-2回		週に3-4回		週に5-6回		ほぼ毎日		その他		無回答	
	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)
子どもと一緒に遊ぶ機会	29	2.0	422	28.7	176	12.0	102	6.9	724	49.2	7	0.5	12	0.8
子どもと一緒に買い物に行く機会	28	1.9	137	9.3	872	59.2	309	21	112	7.6	14	1.0	0	0.0
子どもに本を読み聞かせる機会	105	7.1	139	9.4	576	39.1	322	21.9	330	22.4	0	0.0	0	0.0
子どもの好きな歌と一緒に歌う機会	97	6.6	94	6.4	271	18.4	346	23.5	645	43.8	14	1.0	5	0.3
子どもと公園に行く機会	259	17.6	704	47.8	463	31.5	18	1.2	4	0.3	20	1.4	4	0.3
同年齢の子どもを持つ友人との交流の機会	527	35.8	604	41.0	246	16.7	33	2.2	33	2.2	21	1.4	8	0.5
配偶者(または、それに代わる人)の育児協力の頻度	98	6.7	93	6.3	288	19.6	134	9.1	779	52.9	59	4.0	21	1.4
家族で食事をする機会	29	2.0	17	1.2	182	12.4	123	8.4	1,093	74.3	21	1.4	7	0.5
わざと牛乳をこぼしたときの対応	子どもをたたく		口でわからせる		他の方法で悪いことを分からせる		別の方法でこぼさないように考える		その他		無回答			
	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)
	94	6.4	988	67.1	157	10.7	106	7.2	119	8.1	8	0.5		
1週間のうちに子どもをたたく頻度	たたかない		週1-2回		週3-4回		週に5-6回		ほぼ毎日		その他		無回答	
	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)
	765	52.0	519	35.3	125	8.5	35	2.4	26	1.8	0	0.0	0	0.0
配偶者(または、それに代わる人)と子どもの話をする機会	ほとんどない		月1回程度		週に1-2回		週3-4回		ほぼ毎日		その他		無回答	
	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)
	98	6.7	32	2.2	224	15.2	189	12.8	852	57.9	52	3.5	25	1.7
保育園以外に子どもの世話をしてくれる人の有無	いない		いる											
	人数	(%)	人数	(%)										
	181	12.3	1,291	87.7										
子育てについて相談できる人の有無	いない		いる											
	人数	(%)	人数	(%)										
	53	3.6	1,419	96.4										
子育てに対する自信がなくなる	よくある		時々ある		あまりない		まったくない		その他		無回答			
	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)
	139	9.4	679	46.1	461	31.3	189	12.8	3	0.2	1	0.1		
ストレスの程度(妊娠期)	ない		低い		中程度		やや高い		とても高い		無回答			
	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)
	316	21.5	341	23.2	396	26.9	249	16.9	160	10.9	10	0.7		
ストレスの程度(出産直後)	ない		低い		中程度		やや高い		とても高い		無回答			
	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)
	226	15.4	344	23.4	361	24.5	305	20.7	224	15.2	12	0.8		
ストレスの程度(現在)	ない		低い		中程度		やや高い		とても高い		無回答			
	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)
	192	13.0	419	28.5	462	31.4	279	19.0	120	8.2	0	0.0		
子どもが保育園に行くのを楽しみにしている	たいへん楽しみ		まあ楽しみ		どちらでもない		あまり行きたくない		嫌がっている		無回答			
	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)
	627	42.6	666	45.2	138	9.4	33	2.2	7	0.5	1	0.1		

表6 虐待と関連する要因の検討結果（分析1：Fisherの正確検定 分析2：単変量解析 分析3：多重ロジスティック回帰分析）

項 目	分 析 1					分 析 2	分 析 3	
	Fisherの正確検定				P 値	単変量解析 オッズ比 (95%信頼区間)	多重ロジスティック回帰分析	
	虐待群 n=30 人数 (%)	非虐待群 n=1,470 人数 (%)					オッズ比 (95%信頼区間)	P 値
性 別						0.9(0.4- 1.8)	0.9(0.5- 2.0)	0.772
年 齢						1.2(0.9- 1.6)	1.3(1.0- 1.7)	0.107
育児に自信が持てない	1	3.6	92	6.4	1.000			
母親として不適格と感じる	4	14.3	97	6.8	0.122			
子どもをうまく育てている	4	14.3	88	6.1	0.093			
どのようにしつければいいのか分からない	3	10.7	124	8.6	0.729			
育児についていろいろ心配なことがある	6	21.4	249	17.3	0.612			
子どものことでどうしたらいいのか分からない	1	3.6	78	5.4	1.000			
私は子育てに困難を感じる	3	10.7	68	4.7	0.149			
子どものことは理解できている	0	0.0	0	0.0	—			
子どものことがわずらわしくてイライラする	1	3.6	52	3.6	1.000			
よその子どもと比べて落ち込んだり自信をなくす	1	3.6	42	2.9	0.567			
子どもを育てることが負担である	1	3.6	24	1.7	0.385			
とめどなく叱ってしまう	3	10.7	79	5.5	0.203			
子どもに八つ当たりしては、反省して落ち込む	1	3.6	123	8.5	0.506			
私はおこりっぽい	10	35.7	336	23.2	0.174			
イライラしている	7	25.0	173	12.0	0.071			
何で叱られているのか分からないのに叱ってしまう	4	14.3	33	2.3	0.005	7.1(2.3-21.7)	3.1(0.8-12.1)	0.103
子どもを虐待しているのではないかと思う	1	3.6	22	1.5	0.360			
心配性であれこれ気に病む	7	25.0	123	8.5	0.009	3.6(1.5- 8.6)	0.8(0.2- 3.4)	0.762
何事にも敏感に感じてしまう	8	28.6	102	7.1	<0.001	5.3(2.3-12.2)	2.3(0.5-10.2)	0.256
不安や恐怖感におそわれる	7	25.0	51	3.5	<0.001	9.1(3.7-22.4)	4.9(1.6-21.0)	0.032
楽天的でよくよ考えない	7	25.0	220	15.2	0.182			
悲観的である	4	14.3	54	3.7	0.009	4.3(1.4-12.8)	0.6(0.1- 3.0)	0.545
気が滅入る	6	21.4	74	5.1	0.003	5.1(2.0-12.8)	1.1(0.2- 5.6)	0.895
何ともいえず淋しい気持ちにおそわれる	5	17.9	69	4.8	0.011	4.3(1.6-11.7)	0.6(0.1- 2.7)	0.472
子どもと一緒に遊ぶ機会が乏しい	1	3.7	28	2.0	0.423			
子どもと一緒に買い物に行く機会が乏しい	0	0.0	28	2.0	1.000			
子どもに本を読み聞かせる機会が乏しい	4	14.3	101	7.0	0.134			
子どもの好きな歌と一緒に歌う機会が乏しい	2	7.4	95	6.7	0.700			
子どもと公園に行く機会が乏しい	3	10.7	256	18.0	0.456			
同年齢の子どもを持つ友人との交流の機会が乏しい	15	62.5	939	67.6	0.661			
配偶者（または、それに代わる人）の育児協力が乏しい	4	16.0	94	6.9	0.093			
家族で食事をする機会が乏しい	0	0.0	29	2.1	1.000			
子どもの失敗への対応（たたく）	4	16.0	90	6.8	0.091			
1週間のうち1回以上子どもをたたく	19	67.9	682	47.2	0.035	2.4(1.1- 5.3)	1.9(0.8- 4.4)	0.135
配偶者（または、それに代わる人）と子どもの話をする機会が乏しい	2	8.7	96	7.0	0.674			
保育園以外に子どもの世話をしてくれる人がいない	12	42.9	169	11.7	<0.001	5.7(2.6-12.2)	4.7(2.1-10.9)	<0.001
子育てについて相談できる人がいない	4	14.3	49	3.4	0.016	4.8(1.6-14.2)	1.0(0.3- 3.9)	0.957
育児に対する自信がなくなる	5	17.9	134	9.3	0.178			
子どもが保育園に行くのを楽しみにしている	4	14.3	176	12.2	0.567			
ストレスあり（妊娠期）	2	7.4	158	11.1	0.760			
ストレスあり（出産直後）	3	11.1	221	15.4	0.787			
ストレスあり（現在）	7	25.0	87.8	7.8	0.006	3.9(1.6- 9.4)	1.5(0.5- 4.4)	0.514

(Hosmer-Lemeshow test P 値=0.773)

よび子どもへの適切なサポートが求められる。

3. 育児環境と虐待との関連が示す養育者の特徴

虐待に関連する養育者の育児環境の特徴として「1週間に1回以上子どもをたたく」、「保育園以外に子どもの世話をしてくれる人がいない」、「子どものことを相談する人がいない」、「現在のストレスあり」の4項目が示された。虐待と関連の強い「1週間に1回以上子どもをたたく」に関しては、「非虐待群」の養育者の約半数も「たたく」と回答しており、しつけとして「たたく」ことを選択している養育者が多いことが推測された。園の専門職は、養育者の日常的な子どもへの対応として「たたく」ことはしつけの方法として適切ではないことを伝えるとともに「たたく」ことに代わる効果的な養育方法の指導が期待される。また、子どもの「世話をしてくれる人がいない」や「相談する人がいない」状況に関しては、専門職としての相談・援助機能の有効活用が可能となる。さらに社会資源として休日や緊急時の子どもの預かりに関する情報を収集し養育者に提供することも大切な機能である。

本研究で示された養育者の育児困難感、不安・抑うつ傾向、育児環境からも養育者の現在のストレスが高いことが推測される。園の専門職は、養育者の特徴を把握し、具体的に実践可能な支援の輪を広げて行くことが虐待の発生予防や重篤な虐待への移行の防止につながる。

4. 虐待に関連する要因を他の項目の影響を互いに調整した上で検討した養育者の特徴

多重ロジスティック回帰分析により虐待と有意に関連する要因を他の項目の影響を互いに調整した上で検討した結果、「不安や恐怖感におそわれる」、「保育園以外に子どもの世話をしてくれる人がいない」の2項目が抽出された。抽出された2項目について以下の視点から考察を行った。

1) 虐待と子育て不安、子育てサポートとの関連

「不安や恐怖感におそわれる」は養育者の子育て不安を、「保育園以外に子どもの世話をしてくれる人がいない」は養育者が子育てサポートが得られないことを示す。地縁・血縁の希薄化、核家族化等、子育て家庭を取り巻く環境が大きく変化し、養育者は孤立した中で子育てをしている。これまでの研究では、近所付き合いや友人の付き合いが少ないほど子育て不安が高く、夫の支えや精神的支えが多い母親ほど子育て不安が低い¹⁹⁾と報告されている。また、子育て不安の高い母親ほど虐待傾向や被虐待体験が高い²⁰⁾。さらに、子育てのサポートが少なく子どもを虐待する傾向が高い人は子育て不安も高い¹⁶⁾等が検証されている。本研究において明らかにされた虐待

と有意に関連する2項目は、養育者の子育て不安や子育てサポートの欠如を示しており、先行研究と同様にこれらが虐待に関連する要因であることが明らかとなった。今後、保育園の専門職には、養育者の子育て不安の軽減にむけた関わりとともに、専門職として提供可能な子育てサポートシステム構築への取り組みが望まれる。

2) アタッチメントとの関連

アタッチメントは、養育者が子どもを保護することで、不安感や恐怖感を軽減したり解消し、子どもに安全感をもたらす機能だといわれている²¹⁾。子どもは身近な養育者から繰り返し安全感を提供されることにより、他者に対する基本的信頼感を構築し、自尊感情を獲得していく。逆に、子どもは、虐待を受けることで不安や恐怖感を与えられアタッチメントの形成が阻害される。養育者との安定した愛着の形成は、子どもの心に肯定的な Internal Working Model を形成し、その後の友人関係等にみられる対人関係を良好にすることが指摘されている。また、アタッチメントは乳幼児期に形成されるものの、その時期の特異的な問題ではなく、人間の一生を貫くテーマである。多くの研究において、養育者の Internal Working Model が養育者の感受性や共感性に影響を与えることが検証されている²²⁾。本研究で明らかとなった「不安や恐怖感におそわれる」、「保育園以外に子どもの世話をしてくれる人がいない」からは、養育者のアタッチメントの形成が十分ではないことが示唆される。本研究における虐待群の養育者は幼少時に虐待または不適切な養育を受けていることが推測され、アタッチメントの形成が十分でないことより、身近な子ども（他者）の養育に際し不安や恐怖感におそわれる。また、他者への基本的信頼感が十分に持てず、近隣との付き合いや友人との付き合いが適切に行われなため孤立した中で子育てをしていることが示唆される。

Internal Working Model は、絶えず修正されながら環境に反応して変化するものであり、養育者との関係がすべてではないと指摘されている。保育園の専門職には、養育者や子どもに対し、連続した、個別的な、一貫性のある適切なかわりをするることにより、Internal Working Model の修正が期待される。虐待と有意に関連する項目は、虐待の予防に向けた専門職の適切なかわり（役割）の重要性を示しているといえる。

虐待と関連する養育者の育児困難感、不安・抑うつ傾向、育児環境の具体的な項目は、一自治体の横断研究の結果であり、本研究の限界でもあるが、虐待等不適切な養育の発生予防、重篤な虐待への移行の

防止や早期発見, 早期対応に向けた養育者や子どもへの対応を示唆するものである。

5. 質問紙調査の回答の正確さ

本研究における質問紙への回答率は, 81.7%と高い。しかし, 虐待をする養育者の特徴として, 臨床事例の報告では, 虐待に至る親の認知の歪み等の問題を示唆しているものが多くみられる^{22~24)}。養育者の認知の歪みは, 虐待を行ってしまう極度の精神的不安がある養育者, 虐待を行っているが虐待の自覚がない養育者等の回答に影響を与えることが示唆される。また, 虐待傾向のある養育者の特徴として, 養育者自身の被虐待体験²⁵⁾, 虐待の世代間伝達²⁶⁾, 自己評価が低い^{23,27)}, 親から十分に愛された経験がない^{28,29)}, 攻撃的傾向が強く体罰を多用している³⁰⁾等が報告されている。

これらの特徴から推測すると, 虐待傾向のある養育者の回答がどの程度, 真実を回答しているのか, 回答の正確さについて質問紙への回答から確認することは不可能である。また, 質問紙調査に協力の得られなかった「非虐待群」の養育者17%の虐待との関連等についても, 確認することはできない。いずれも質問紙調査の限界であるといえる。今後の課題として, 認知の歪み等, 虐待傾向のある養育者の特徴をふまえて, より正確な回答を得るため, また, より多くの対象者から正確な回答を得るため, どのような配慮や工夫が必要か等, の検討も求められる。

V 結 語

育児困難感や不安・抑うつ傾向および育児環境と虐待との関連より, 保育園等の専門職が養育者への具体的かつ活用可能な支援の方策が得られ, 虐待の発生子防, 早期発見, 早期対応の一助となることが示唆された。

今後の課題として, 養育者側の要因と子ども側の要因を含めた継続的な研究の必要性が示唆された。

本研究は, 科学研究費(23330174, 21653049)の助成を受けて実施したものである。調査にご協力いただいた全国夜間保育園連盟の天久薫会長をはじめ連盟の皆様, 保護者の皆様に深謝いたします。

(受付 2013. 3.14)
(採用 2014. 3.24)

文 献

- 1) 西澤 哲. 子どもの虐待: 子どもと家族への治療的アプローチ. 東京: 誠信書房, 1994; 27-79.
- 2) Nayak MB, Milner JS. Neuropsychological functioning: comparison of mothers at high- and low-risk for child physical abuse. *Child Abuse Negl.* 1998 Jul; 22(7): 687-

- 703.
- 3) Cappell C, Heiner RB. The intergenerational transmission of family aggression. *Journal of Family Violence* 1990; 5(2): 135-152.
- 4) 本間博彰. 子どもにみるトラウマ 児童虐待と親の問題: ハイリスクマザーと治療的アプローチを中心に. *児童青年精神医学とその近接領域* 2002; 43(4): 389-394.
- 5) 高橋重宏. 子ども虐待: 子どもへの最大の人権侵害. 東京: 有斐閣, 2001; 111-124.
- 6) 玉井邦夫. <子どもの虐待>を考える. 東京: 講談社, 2001; 108-142.
- 7) Trickett PK, Aber JL, Carlson V, et al. Relationship of socioeconomic status to the etiology and developmental sequelae of physical child abuse. *Developmental Psychology* 1991; 27(1): 148-158.
- 8) 川井 尚, 庄司順一, 千賀悠子, 他. 育児不安に関する臨床的研究V: 育児困難感のプロフィール評定質問紙の作成. *日本子ども家庭総合研究所紀要* 1998; 35: 1-15. <http://www.aiiku.or.jp/aiiku/kiyo/kiyo35.htm> (2014年4月28日アクセス可能)
- 9) 安梅勅江. 子育て環境と子育て支援: よい長時間保育のみわけかた. 東京: 勁草書房, 2004; 1-144.
- 10) 安梅勅江, 篠原亮次, 杉澤悠圭, 他. 学童期の心身の健康に関連する幼児期の環境要因に関する研究: 家庭環境と保育時間に焦点をあてて. *日本保健福祉学会誌* 2006; 13(1): 19-26.
- 11) 安梅勅江, 篠原亮次, 杉澤悠圭, 他. 幼児期における子育て環境が学童期の子どもの心身の健康に及ぼす影響. *厚生指標* 2007; 54(6): 20-25.
- 12) 黄川田美玲, 安梅勅江, 丸山昭子, 他. 保育園を利用する4歳児の発達への複合的な関連要因に関する研究: 母親のストレスに焦点をあてて. *日本保健福祉学会誌* 2006; 12(2): 15-24.
- 13) 丸山昭子, 大関武彦, 安梅勅江. 保育園を利用する2歳児の発達・社会適応・問題行動・健康状態への複合的な関連要因: 母親のストレスに焦点をあてて. *厚生指標* 2006; 53(6): 24-33.
- 14) 安梅勅江, 丸山昭子, 田中 裕, 他. 母親のストレスの子育て環境と子どもの発達との複合的な関連性: 保育園を利用する1歳児の全国調査結果から. *こども環境学研究* 2007; 2(3): 32-37.
- 15) Belsky J. The determinants of parenting: a process model. *Child Dev* 1984; 55(1): 83-96.
- 16) 八重樫牧子, 小河孝則, 田口豊郁, 他. 乳幼児を持つ母親の子育て不安に影響を与える要因: 子育て不安と児童虐待の関連性. *厚生指標* 2008; 55(13): 1-9.
- 17) Ainsworth MDS, Blehar MC, Waters E, et al. *Patterns of Attachment: A Psychological Study of the Strange Situation*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum, 1979; 1-372.
- 18) 山口敬子. 要養護児童のアタッチメント形成と里親委託制度. *福祉社会研究* 2007; 8: 65-79.
- 19) 八重樫牧子, 小河孝則. 母親の子育て不安と母親の就労形態との関連性に関する研究. *川崎医療福祉学会*

- 誌 2002; 12(2): 219-239.
- 20) 八木樫牧子. 母親の虐待的傾向および虐待的経験との関連性からみた母親の子育て不安. 子ども家庭福祉学 2003; 3: 11-23.
- 21) Bowlby J. 母子関係の理論: I 愛着行動(新版) [Attachment and Loss, Vol. 1: Attachment (2nd Edition)] (黒田実郎, 大羽 泰, 岡田洋子, 他訳). 東京: 岩崎学術出版社, 1991.
- 22) 池田由子. 児童虐待: ゆがんだ親子関係. 東京: 中央公論社, 1987; 96-166.
- 23) 西澤 哲. 子どもの虐待: 子どもと家族への治療的アプローチ. 東京: 誠信書房, 1994; 19-53.
- 24) 渡辺久子. 母子臨床と世代間伝達. 東京: 金剛出版, 2000; 11-261.
- 25) Egeland B, Jacobvitz D, Sroufe LA. Breaking the cycle of abuse. Child Dev 1988; 59(4): 1080-1088.
- 26) Hunter RS, Kilstrom N. Breaking the cycle in abusive families. Am J Psychiatry 1979; 136(10): 1320-1322.
- 27) Coohey C, Braun N. Toward an integrated framework for understanding child physical abuse. Child Abuse Negl 1997; 21(11): 1081-1094.
- 28) Steele BF. Notes on the lasting effects of early child abuse throughout the life cycle. Child Abuse Negl 1986; 10(3): 283-291.
- 29) 津崎哲郎. 児童虐待: 福祉機関の援助と課題. 児童青年精神医学とその近接領域 1992; 33(5): 396-399.
- 30) Haskett ME, Kistner JA. Social interactions and peer perceptions of young physically abused children. Child Dev 1991; 62(5): 979-990.
-

The influence of caregivers' anxiety and the home environment on child abuse A study of children attending child-care centers

Yukiko MOCHIZUKI*, Emiko TANAKA^{*,4*}, Ryoji SHINOHARA^{2*}, Yuka SUGISAWA^{3*},
Etsuko TOMISAKI*, Taeko WATANABE*, Kentaro TOKUTAKE*, Misako MATSUMOTO*,
Chihiro SUGITA* and Tokie ANME*

Key words : child abuse, child-rearing anxiety, child-rearing environment, early detection, child-care centers

Objectives The prevalence of child abuse is increasing in Japan. Therefore, we need appropriate and practical approaches for implementing feasible prevention, early detection, and support services for abused children. The purpose of this study was to examine child-rearing anxieties and the home environment as factors affecting caregivers of suspected abused children who attend child-care centers.

Methods First, we applied the millennium edition of the Japan Child and Family Research Institute (JCFRI) Child Rearing Support Questionnaire, and the Index of Child Care Environment (ICCE), for 1,801 caregivers whose children were enrolled in child-care centers based in City A. The millennium edition of the JCFRI Child Rearing Support Questionnaire measures difficulties in childcare for caregivers in terms of feelings, anxiety, and tendencies toward depression. The ICCE measures the quality and frequency of involvement of caregivers with their children and the child-care environment. Next, we interviewed the directors and child-care professionals in the centers to collect information on child abuse. The children were divided into two groups: abused and non-abused. The “abused group” consisted of the children whom the directors and professionals of the child-care centers suspected of being “possibly abused” and so had been placed under the protection of the center; furthermore, the center exchanged information with the City A Municipality “City A municipal government” about these children. We conducted Fisher’s exact test to examine the relationship between the “abused group” and the “non-abused group,” in relation to child-rearing anxiety and the children’s home environments. Questionnaire scores from the two groups were assessed. We calculated odds ratios to examine the significant factors related to child abuse. Our dependent variable was child abuse, our main independent variables were items related to child-care difficulties and the child-care environment, and the moderating variables were age and gender. We used multiple logistic regression to assess the actual child abuse predictors.

Results The odds ratios obtained by comparing the “abused group” with the “non-abused group” showed that the caregivers of children in the “abused group” had a 5.5-fold greater odds of saying, “I am riddled with uneasiness and awful feelings,” and a 4.6-fold greater odds of saying, “I do not have anyone to look after my child except a child-care center.” The moderating variables (age and gender) were not significant.

Conclusion Child-care professionals have a policy for ensuring there is concrete and usable support for caregivers, depending on the relationship between the abused child and the difficulties present in the child’s environment. We suggest that awareness of these relationships can be promoted as an aid for early child abuse detection, support, and prevention.

* University of Tsukuba, Comprehensive Human Sciences

^{2*} University of Yamanashi, Health Sciences, Japan

^{3*} Ushiku City Hall

^{4*} JSPS Research Fellow